

# アメリカ学会会報

—The American Studies Newsletter—

No.179

July 2012

## オバマ大統領の選挙戦 ——2008年と2012年——

久保文明

本年の大統領選挙、劇的ともいえる2008年の選挙戦との違いは大きい。08年は金融危機やイラク戦争の失敗など、すべて共和党のせいにすればよかった。オバマの新鮮な物語に多くの有権者は酔った。とくに、アメリカ人は一つにまとまるとき、偉業を成し遂げることができる。自分であれば、アメリカを一つに団結させられるというストーリーは魅力的であった。曰く、イギリスからの独立。できるわけがないという反応が当初は圧倒的であった。しかしアメリカ人は団結して戦い、できたではないか。第二次大戦後に南部に残った黒人差別制度の撤廃についても、白人と黒人が力を合わせ、達成した。白人と黒人、民主党（ブルー）と共和党（レッド）、そして保守とリベラルに分断されたアメリカに終止符を打とう。白人と黒人の間に生まれた自分ならそれができる…。

ブッシュ政権下のアメリカは、イラク戦争や京都議定書離脱などのため、世界から批判を受けた。それを憂慮するアメリカ人にとって、オバマを当選させることは、歴史を作ることであるとともに、アメリカの善を再確認し、同時にそれを世界にアピールする格好の機会でもあった。

ほぼ4年が経過した今、幻滅感は大きい。就任時に7.8%であった失業率は、10%を越える水準から低下したもの、依然8.2%にとどまっている。医療保険改革、金融改革など、多数の重要な成果を挙げたオバマに対する支持率が47-48%にとどまっている最大の原因も、景気立ち直りの遅れにある。たとえばオバマ政権が09年2月に実現した7870億ドルの景気刺激策に対して、10年11月の中間選挙当日の出口調査において、約3分の1の有権者が積極的に経済を悪くしているとみなし、約3分の1がよくも悪くもしていないと考え、残りの3分の1のみが経済を好転させていると評価していた。日本であれば、これだけの規模の景気刺激策に対して、ほぼ無条件で高い評価が与えられるであろう。巨大な経済危機を3-4年のうちに回復させることを要求し、達成

されないと見放すアメリカの有権者の判断は性急なようにも見える。ただし、景気を良くすると約束したから一票を投じたのであって、できないのであれば支持を撤回するのは当然だという有権者の感覚にも一理あろう。

オバマは10年11月の中間選挙敗北後、下院で新しく多数党となった共和党と妥協を図るべく、一時経済界や保守派にも妥協的で、中道的な路線を選択したように見えた。しかし、第一に度重なる妥協によって支持基盤の民主党リベラル派が失望し、第二に、オバマの妥協にもかかわらず共和党、とくにそのもっとも右派を形成するティーパーティ系議員集団の方はほとんど妥協しようとしなかったために、オバマは11年秋には再び路線を転換し、共和党の保守路線と正面から対決し、それを徹底して批判しながら選挙戦を戦うことを決意した。そして勝つためには、当初オバマ自身批判的であったスーパーPAC（企業・労組・個人から無限に選挙資金を集め、テレビ広告などに支出することができる団体）についても、自ら利用するところまで態度を変化させた。現在、共和党候補ロムニーと共和党に対して、超富裕者に対するごく僅かの増税すら拒否する極端な立場であるとの批判を浴びせている。アメリカを一つにまとめるのでなく、共和党保守派を徹底的に攻撃する選挙戦略である。

かくして、今回のオバマの選挙戦は現職が再選を求めるてもがく普通の選挙になった。現在、世論調査の平均値ではオバマ対ロムニーで数パーセント差でオバマがリードしているが、これは誤差の範囲内であり、いつでも逆転可能である。08年に共和党のマケインは最悪の条件が揃ったと思われる環境で46%を獲得しているので、ロムニーが48%程度を得ることは容易である。11月にどちらが勝つかはまったく予断を許さない。

むろん、オバマが負けたとしても、アメリカ初の黒人大統領としての意義が消え失せるわけではない。

(東京大学)

## 新会長挨拶

先の年次大会で、会長に就任いたしました。大変名誉なこと感じますとともに、はたして私ごとに、日本のアメリカ研究の一つの中心的学術組織である本学会の運営伝統を統括するという重責が務まるのか、大いに不安があります。ただ幸いにして、久保、小檜山両副会長をはじめとする優秀な常務理事会のサポート体制が確立しておりますので、それを頼りに2年間の職責を果たして参りたいと思います。

周知のように本学会は、1947年にはじめて創設された全国的なアメリカ研究者の連絡、協力組織を、その前身としております。このいわゆる第一次アメリカ学会の結成に関わった研究者は、わずか25人であったと記録されています。その後、1966年に第二次アメリカ学会が再建されて以後、46年間に会員数は約1200名にまで増加してきました。その間、学会員がカヴァーする研究領域も人文社会科学のあらゆる領域に及び、現在では年々、「清水博賞」や「斎藤真賞」の受賞作や候補作をはじめとして、特に若い世代の会員による多くの優れた研究成果が生み出されています。今後も、こうした研究の発展と発信を継続してゆくことは、本学会の最も重要な目的であることはいうまでもありません。

しかし、同時に留意しなければならないのは、このような組織としての拡大や研究成果の増加が、それだけでわが国の「アメリカ研究」の発展や、それに対する本学会の寄与の大きさを意味するわけでは必ずしもないという点です。というのも、上述の優れた研究成果の中には、狭義のアメリカ研究とは別の専門的学術分野——政治学、経済学、社会学、人類学、心理学、文学等々——で発想・構想され、リサーチされ、達成された業績が少なくないからです。それらは、そうした専門分野でたまたま「アメリカ」という地域に素材を求めた結果、「アメリカ研究」の成果として本学会に認定された例といえましょう。言い換えると、「アメリカとは何か」という従来の「アメリカ研究」にとって不可避の問い合わせを迂回する研究、迂回しても優れたアメリカ論を含む研究が、数多く見られるようになっています。このような学術の専門分化の進む時代に、アメリカ研究はどのようにユニークな学術的貢献をなし得るのかを真剣に考えることが、本学会の将来にとり大事な課題となっているように思えます。本学会が、人文社会科学の専門分野からなる緩い連合体となってゆくのか、それともグローバル化が進展する世界の中で、あらためて「アメリカ」の意味を問う学際的、国際的な研究組織たり得るのか、アメリカ研究は今そのような過渡期にあるように思います。

微力ですが、学会のさらなる学術的活性化に少しでも貢献できるよう力を尽くしたいと思います。会員の皆様の学会活動に対するいっそその積極的な参加とご協力を切にお願いするしだいです。

古矢 旬

## アメリカ学会役員一覧（2012～2013年度）

### 会長

古矢 旬（北海商科大）

### 副会長

久保 文明（東京大）

小檜山ルイ（東京女子大）

### 常務理事

伊藤 裕子（亜細亜大）

小檜山ルイ（東京女子大）

中野 聰（一橋大）

宇沢 美子（慶應義塾大）

庄司 啓一（城西大）

新田 啓子（立教大）

貴堂 嘉之（一橋大）

高尾 直知（中央大）

森本あんり（国際基督教大）

久保 文明（東京大）

中野耕太郎（大阪大）

矢口 祐人（東京大）

### 理事

阿部 珠理（立教大）

下河辺美知子（成蹊大）

橋川 健竜（東京大）

生井 英考（立教大）

庄司 啓一（城西大）

樋口 映美（専修大）

伊藤 裕子（亜細亜大）

高尾 直知（中央大）

藤本 博（南山大）

宇沢 美子（慶應義塾大）

舌津 智之（立教大）

増井志津代（上智大）

遠藤 泰生（東京大）

巽 孝之（慶應義塾大）

松本 悠子（中央大）

大塚 寿郎（上智大）

田中きく代（関西学院大）

村田 晃嗣（同志社大）

大津留（北川）智恵子（関西大）

中條 献（桜美林大）

森本あんり（国際基督教大）

小塩 和人（上智大）

中野 勝郎（法政大）

矢口 祐人（東京大）

川島 浩平（武蔵大）

中野耕太郎（大阪大）

山田 史郎（同志社大）

貴堂 嘉之（一橋大）

中野 聰（一橋大）

李 鍾元（立教大）

久保 文明（東京大）

長畠 明利（名古屋大）

和田 光弘（名古屋大）

小檜山ルイ（東京女子大）

西崎 文子（東京大）

渡辺 靖（慶應義塾大）

佐々木卓也（立教大）

新田 啓子（立教大）

佐藤千登勢（筑波大）

能登路雅子（東京大）

### 監事

大西 直樹（国際基督教大）

糸井 輝子（白百合女子大）

前川 玲子（京都大）

## 2011年度決算および2012年度予算

さる6月3日の総会において2011年度決算および2012年度予算についてご承認頂きましたが、ここに決算書および予算書を掲載し、会員各位へのご報告とさせて頂きます。なお、2011年度の確定決算書は、出納帳

簿その他の関係書類とあわせて、上杉忍、森孝一、佐々木隆各監事の監査を受け、3監事から、決算を適切と認める旨の監査報告書が会長宛に提出されています。  
(財務担当 松本悠子)

### 2011年度決算 & 2012年度予算

□収入の部

科 目	2011年度予算	2011年度決算	2012年度予算
1. 年会費	9,000,000	9,494,447	9,400,000
2. アメリカ研究振興会助成金	600,000	600,000	600,000
3. 雑収入	450,000	620,211	450,000
4. 日本学術振興会科研費補助金	700,000	700,019	800,000
5. 日米友好基金	510,000	1,330,484	510,000
6. 広告収入	320,000	324,000	308,000
7. 寄付金	0	510,091	0
8. 年次大会外国人旅費補助金(アメリカ研究振興会)	0	0	250,000
9. 國際交流活動費戻し金	0	251,674	0
小計	11,580,000	13,830,926	12,318,000
10. 前期繰越金	4,973,627	4,973,627	6,453,552
<b>合 計</b>	<b>16,553,627</b>	<b>18,804,553</b>	<b>18,771,552</b>

□支出の部

科 目	2011年度予算	2011年度決算	2012年度予算
1. 会務費(計)	4,460,000	4,223,277	4,250,000
(01)事務局人件費	2,700,000	2,784,400	2,480,000
(02)常務理事会費	150,000	4,930	300,000
(03)役員選挙関係費	20,000	97,136	0
(04)会務郵送通信費	150,000	115,718	130,000
(05)事務用品費	150,000	104,105	130,000
(06)名簿作成積立費	200,000	200,000	150,000
(07)コピー関係費	450,000	447,206	450,000
(08)設備予備費	180,000	106,080	150,000
(09)広報・電子化情報委員会費	140,000	97,540	140,000
(1)委員会費	40,000	0	40,000
(2)プロバイダー通信費他	100,000	97,540	100,000
(10)口座振替・郵便振替手数料	120,000	110,628	120,000
(11)会務雑費	200,000	155,534	200,000
2. 研究事業費(計)	8,927,500	8,127,724	12,327,500
(1)年次大会費	1,780,000	1,035,474	2,190,000
(1)準備費	560,000	465,789	560,000
(2)大会費	920,000	414,110	920,000
(3)外国人研究者旅費	0	0	410,000
(4)企画委員会費	300,000	155,575	300,000
(2)年報刊行費	2,100,000	1,854,221	2,100,000
(1)年報編集委員会費		233,260	
(2)年報印刷費		1,368,738	
(3)年報郵送通信費		151,676	
(4)年報雑費		100,547	
(3)英文ジャーナル刊行費	2,600,000	2,155,718	2,700,000
(1)英文編集委員会費		84,000	
(2)英文印刷費		1,076,617	
(3)英文郵送通信費		352,962	
(4)コピー・エディター費		459,000	
(5)英文人件費		0	100,000
(6)英文雑費		183,139	
(4)会報刊行費	950,000	905,108	950,000
(1)会報印刷費		475,020	
(2)会報郵送通信費		263,868	
(3)会報雑費		166,220	
(5)国際交流活動費	702,500	1,413,650	702,500
(6)研究教育支援費	520,000	180,000	1,400,000
(7)清水博賞委員会費	75,000	83,553	85,000
(8)斎藤眞賞委員会費	50,000	0	50,000
(9)斎藤眞賞基金	0	500,000	0
(10)研究教育交流積立金			1,000,000
(11)事務所移転準備金			1,000,000
(12)研究事業予備費	150,000	0	150,000
小計	13,387,500	12,351,001	16,577,500
3. 次期繰越金	3,166,127	6,453,552	2,194,052
<b>合計</b>	<b>16,553,627</b>	<b>18,804,553</b>	<b>18,771,552</b>

# アメリカ学会 2011 年度会務報告

## 1. 会員数

今年度は 42 名の新入会員があり、2011 年度末（2012 年 3 月 31 日現在）の会員数は 1160 名である。  
会員数の増減： 2010 年度末比 -23 名  
新入会員： 30 名  
退会員（含む逝去者）： 55 名（会費払済み年度末退会 27, 途中退会 8, 逝去 4, 未納除籍 16）  
復 帰： 2 名

## 2. 年次大会

2011 年度年次大会（第 45 回）は、「会報」第 173 号に掲載された要領に従い、2011 年 6 月 4 日～6 月 5 日に東京大学において開催された。

## 3. 年報

年報『アメリカ研究 (The American Review)』第 46 号を本年 3 月に刊行した。  
(詳細は個別事業報告)

## 4. 会報

「アメリカ学会会報 (The American Studies Newsletter)」第 175 号（4 月）、176 号（7 月）、177 号（11 月）を発行した。(詳細は個別事業報告)

## 5. 英文ジャーナル

英文ジャーナル、*The Japanese Journal of American Studies* 第 22 号を 2011 年 6 月に刊行した。(詳細は個別事業報告)

## 6. アメリカ学会清水博賞

2011 年度（第 17 回）アメリカ学会清水博賞 該当作品なし。

## 7. 斎藤真賞

2009 年度に委員会を設置。選考を経て 2011 年度（第 2 回）アメリカ学会斎藤真賞を第 46 回年次大会総会で以下の 3 名に授与（詳細は「第 2 回斎藤真賞」にて報告）。  
中野耕太郎（大阪大学）、鶴淵秀一（ハーバード大学・東京大学・[院]）、増田久美子（駿河台大学）

## 8. ホーム・ページの充実

広報・電子化情報委員会の主導で展開。(詳細は個別事業報告)

## 9. 國際委員会

ASA から派遣される年次大会ワークショップにおける報告者の選定を進めるとともに、Organization of American Historians (OAH) 派遣講師の選定と受け入れ先校を決定した。

日米友好基金グラン트による OAH 研究者の日本短期滞在プログラムは下記の 1 名が短期間講義あるいは講演を行った。もう 1 名の予定者 (Catherine Ceniza Choy [UC Berkeley] 一橋大学/貴堂嘉之) については震災の影響で 2012 年に実施が延期された。

Deborah Dash Moore (University of Michigan) 北九州市立大学/北 美幸

■ 日米友好基金グラン트、アメリカ研究振興会等の補助により以下の派遣と招聘を行った。

- ASA (米国 Baltimore, MD 2011 年 10 月 20 日～23 日)  
石井紀子（大妻女子大学）、大野あずさ（大阪経済大学）、中野聰（一橋大学）、能登路雅子（東京大学）、阿部珠理（立教大学）、緒方房子（帝塚山大学）

- American Studies Association of Korea (ASAK) (韓国ソウル 2011 年 9 月 22 日～24 日)  
松本悠子（中央大学）、小澤英実（東京学芸大学）

- Organization of American Historians (OAH) (米国 Milwaukee, WI 2012 年 3 月 18 日～22 日)  
川島浩平（武藏大学）

- 在米大学生対象の旅費補助プログラムに関しては、ASA (Baltimore) 年次大会に 4 名（体調不良で 1 名辞退）、OAH (Milwaukee) 年次大会に 5 名の助成を行った。

- 震災の関係で ASA/ASAK 招聘プログラムは全て中止した。

- アメリカ大使館賞は ASA (Baltimore) 年次大会の参加助成を斎藤弘平会員（青山学院大学）が受賞。OAH (Milwaukee) 年次大会の参加助成を臺丸谷美幸会員（お茶の水女子大学）が受賞。

## 10. 研究会の開催

今年度の活動としては下記の研究会、7 件を共催した。詳細は学会ニュースレターに記載。

東京大学アメリカ太平洋地域研究センターとの共催で 7 件。

### 東大駒場・センター関係

2010

- 4.19 Sidney Pash (Fayetteville State Univ.), "The China Card: Sino-American Relations and Origins of the Pacific War"

- 6.21 Yen Espiritu (Univ. of California, San Diego), "Asian American Feminist Critique of the 'War on Terror'"

- 6.27 Henry Yu (The Univ. of British Columbia), "The Forgotten History of Chinese Aboriginal Relations in North America"

- 7.27 Paul A. Kramer (Vanderbilt Univ.), "We Are Here Because You Were There: Migration and Empire in U.S. Global Histories"

- 11.29 Barbara Johnes (Tacoma Art Mueum), "Signs of Home: The Paintings and Wartime Diary of Kamekichi Tokita"

2011

- 2.6 Chris Dixon (Univ. of Queensland), "An International Aspect of Antebellum Africans of Black Nationalism"

- 2.9 Chris Dixon (Univ. of Queensland), "Abolitionism and Gender Reform"

## 11. その他

## 新刊紹介

竹内俊隆 編著

### 『日米同盟論——歴史・機能・周辺諸国の視点』

(ミネルヴァ書房, 2011年, 7,350円)

2011年は、日米安保条約が調印されてから60年目であった。この長きにわたって日本外交の基軸として機能してきた日米同盟を、「総合的かつ重層的に振り返ることによって、日米同盟の将来的な展望を考えてみよう、見通したい」との目的で編まれたのが本書である。

本書は、3部構成で、編者の竹内俊隆による序論に統いて、「時間軸」を分析の中心に据える第1部が、日米安保成立以前から現代までの日米同盟の歴史を跡付ける。第1章(中嶋啓雄)は、日米同盟史の「前史」として、日米の知的交流という側面から戦前と戦後の連続と断絶について論証している。第2章から第4章までは、楠綾子と宮岡勲が、安保条約の成立から改定、沖縄返還を経て今日に至るまでの歴史的経緯を分析する。

第2部では「機能軸」から日米同盟を分析する諸論文が並ぶ。第5章では池田慎太郎が、日本本土と沖縄の米軍基地問題について検証する。野村茂治による第6章は、貿易、金融、国際公共財といった観点から日米の経済関係について論じる。第7章(土屋由香)は原子力の平和利用に関する分析である。アメリカが原子力についていかなる対日広報文化外交を推進したかが論じられる。第8章では、久保田ゆかりと佐藤内午が日米の防衛装備・技術協力について検討し、第9章では、山田康博が1950年代から70年代までを分析対象として、「核の傘」をめぐる日米関係に切り込んでいる。

第3部はアメリカやアジア諸国の日米同盟に対する視点という「地理軸」から日米同盟の姿を描き出している。編者は「日本から見た周辺諸国ではなく、逆の視点を重視している点が、類書と異なる新機軸であると考えている」と述べているが、まず第10章で石川卓が、アメリカにとっての日米同盟の位置づけを論じ、第11章は日米同盟に対する中国の対応の変遷に関する杉浦康之の論考である。第12章では、小林聰明が、沖縄返還をめぐる韓国外交の展開を、日米韓の「トライアングル」関係のなかで明らかにした。第13章(門間理良)は、日米同盟が台湾にとってきわめて重要なことを解明する。東南アジアに視線を向けた第14章においては、ASEAN地域フォーラムと日米同盟の連関について、「9・11」以後のテロリズムと東シナ海における領有権争いを事例として、高埜健が論証している。

終章では編者の竹内が、「中国の台頭と日米同盟の対応」を論じ、経済的には「関与政策」以外の選択肢はないと指摘する。軍事・政治については、世界的には「関与政策」が必要だが、地域レベルでは、予見しうる将来に「用心政策」を取らざるをえないと結論づけている。

15名もの研究者による、450頁を超える重厚な研究書である本書は、日米同盟を多角的に検証した労作だといえる。日米同盟のあるべき姿を模索するうえで、必ず参考すべき貴重な研究成果であるといえよう。

吉次公介(沖縄国際大学)

山本秀行 著

### 『アジア系アメリカ演劇——マスキュリニティの表象』

(世界思想社, 2008年, 2,520円)

日本におけるアメリカ演劇の研究書が極端に少ない中で、本書はテーマをアジア系アメリカ演劇とそのマスキュリニティの表象に特化し、研究、実践ともに歴史の浅いこの分野をわかりやすく論じた意欲作である。

著者はまず、白人男性中心のアメリカ社会で、アジア系アメリカ人男性のマスキュリニティが「非・男性化」され、ステレオタイプ化された経緯を解説する。第一部は、このステレオタイプに抵抗し、アジア人男性主体の再構築を試みる戯曲および映像表象(フランク・チン、フィリップ・K・ゴタンダ、ブルース・リー等)を取り上げ、第一世代の抵抗とその問題点を考察する。第二部では、『M・バタフライ』により劇作家としての地位を確立した中国系アメリカ人劇作家D・H・ホワンの戯曲が、オルタナティヴなマスキュリニティ、人種・ジェンダー・セクシュアリティ《神話》の脱構築、オリエンタリズム、パフォーマティヴなアイデンティティといった切り口から分析され、第三部は1990年代以降のアジア系アメリカ演劇の新潮流を中心に、ダン・クワンのソロパフォーマンスや、チャイ・ユウのクィアパフォーマンスを考察する。

アジア系演劇、マスキュリニティといったいずれも主流とはい難い、しかし近年活発化したジャンルの先行研究と作品を、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、ポストコロニアリズムといった視点からいねいに解説し、このジャンルの概要を明らかにするという点で本書は秀逸である。文章は平明で無駄が多く、「キャンプ」「脱構築」「オリエンタリズム」等々、批評の切り口となる用語もわかりやすく配置・解説されており、作品、作家、それらを論じる枠組みが理解できるように書かれている。巻末のアジア系アメリカ演劇の概説および詳細な文献リストは、膨大な時間と努力を費やし整理した著者の知見であり、今後のアジア系アメリカ演劇研究で大いに参照されるであろう貴重な資料となっている。

このジャンルの歴史化に感慨を覚えつつも、本書に欠ける視点を指摘するならば、社会政治的文脈と、上演テクストや身体の問題についての理論的かつ批判的考察であろう。「多文化主義時代の幅広い層の観客を引き付けることができた」「アジア系男性のホモセクシュアリティがテーマになっているにもかかわらず、人種、セクシュアリティ、ジェンダーを超えた幅広い層の観客の共感を得ることに成功している」といった結論には違和感を覚えないでもない。今や国家のプロジェクトとして公に紹がれる「多文化主義のアメリカ」という支配的物語は、いっそ複雑な問題とアイデンティティボリティクスにまつわる陥穽をはらむ。パフォーマンスを含む比較的新しい作品群を俎上に乗せ、言語テクストのテーマと内容、政治的公正さ、リベラルでヒューマニスティックな共感や感動を基準に論じるにはやや無理があるようと思われる。また、アジアを人種化し、ジェンダー化するアメリカの現象を、その大多数が自らをアジア人と自覚しない極東の地で研究する独自性についても踏み込んだ議論があつてよかったかもしれない。

戸谷陽子(お茶の水女子大学)

藤田尚則 著

『アメリカ・インディアン法研究（I）——インディアン政策史』

（北樹出版、2012年、9,500円）

本書は、合衆国の連邦インディアン法について、植民地時代から現在に至るまでの歴史的変遷を通史的に詳説した大著である。具体的には、「インディアン部族との交渉過程、今日でもその効力を有するインディアンとの間に締結された多数の条約及び合衆国議会が制定してきたインディアン関連立法の制定過程とその内容、更には過去の連邦ないし州とインディアンとの間の具体的訴訟事件」を検討することで、インディアン法と連邦政府の対先住民政策の変容過程を概観する試みである。

インディアン法研究とは、一般的には、インディアン部族（と合衆国によって認定された政体とその成員）と合衆国と各州という三者の関係にかかる条約、制定法、行政命令、判例等によって構成される一連の法体系とそれに関する一般的・理論的な研究の総称を指す。したがって本書も、インディアン部族と合衆国と州の三者の関係について、立法・行政・司法それぞれの見解や動向を踏まえつつ通時的に詳述する構成となっている。

本書の特徴としては、主要なインディアン法についての抄訳と解釈に加えて、先住民政策の変遷や時代背景についても考察を加えていることが挙げられる。たとえば、1831年のチェロキー・ネーション対ジョージア事件判決や1887年の一般土地割当法といった主要な判決や法律について、同時代の連邦政府による対先住民政策と関連づけながら通時的に検討されている。また、合衆国の先住民政策においては、先住民社会が元来多様であったことに加えて、北部・南部・南西部・西部といった地域や州（準州）で時として相反する施策が講じられてきた経緯がある。そのため本書では、必要に応じて、地域・州レベルでの個々の部族の事例に基づいた共時的な比較分析がなされている。さらに、1960年代以降に次々に制定された先住民に関する法律の抄訳や解説も充実しており、近年の動向を理解するうえできわめて有益である。

連邦インディアン法に関しては、主に法律学や法制史、政策史の領域での膨大な研究蓄積がある。とりわけ、本書でも度々言及されている連邦インディアン法の権威であるフェリクス・S・コーヘン（Felix S. Cohen）による研究書（*Handbook of Federal Indian Law*）や一連の論考は、いわば古典として必読の書となっている。ところが日本においては、法的な観点からの合衆国の先住民史研究は、管見の限りではごくわずかしか存在しない。本書は、インディアン法という深遠なる研究領域に分け入ろうとする研究者にとって必携の書であるのはいうまでもない。それと同時に、本書が提示するインディアン部族なる法的カテゴリーの生成・変容過程についての知見は、合衆国における国民統合の過程そのものを再考する際の礎としての役割をも果たしてくれるだろう。

中野由美子（成蹊大学）

矢口祐人 著

『憧れのハワイ——日本人のハワイ観』

（中央公論社、2011年、2,100円）

「楽園のハワイ」——日本においてもアメリカにおいても、人々はハワイを楽園イメージで語ってきた。アメリカでは、ハワイ文化に対する帝国主義的な歴史を含め、この楽園イメージが形成されてきたプロセスについて批判的に検討されてきた。そしてこのアメリカにおける研究は日本でも数多く紹介されてきた。しかし日本とハワイは日米関係史の中で独特の歴史を歩んできたが、この日本の文脈の中で発展してきたハワイの楽園イメージについてこれまでほとんど検証されてこなかった。本書は、日本の中でハワイが楽園イメージで語られるようになった100年の歴史を明らかにした研究書である。観光文化論とハワイ史の見地に立った本書は、ハワイが憧れの観光地になった日本国内の語りを記述/分析するだけでなく、その語り口がハワイの人々にとってどのような意味をもってきたのかにも言及している。

本書は時代区分にしたがって6つの章から構成されている。第1章と第2章は、海外旅行が自由化される以前の戦前と戦中に注目している。この時期を矢口氏は、20世紀後半以降の日本社会におけるハワイのイメージの礎をつくりあげた時期と位置づけ、訪問者による手記や報道記事などの1次史料によって、ハワイが魅力的な楽園として描かれていた過程を緻密に分析している。そして第2章で真珠湾攻撃後、アメリカとの戦争を正当化するために日本がハワイを利用していった経緯を明らかにしている。第3章からは、戦後の日本でハワイが憧れの島から定番の観光地へと変貌していく過程を明らかにしている。特に海外旅行の大衆化が、観光客の訪問目的や旅のスタイルを大きく変え、さらにそれが旅行者のローカル文化との関わり方に変化をもたらしたことによって、近年のフラーを始めとするハワイ文化への高い関心を生み出していた。この戦後の日本における観光文化の変化を矢口氏は見事に描き出している。

本書の特色は二つある。ひとつは、ハワイの人々—特に先住民や日系移民—に対する「日本人」の見方を取り上げている点である。戦前の訪問者は、ハワイで先進国アメリカの近代文明を目の当たりにし、アメリカ化した日系移民に好意的な目を向けたが、ハワイ先住民に対してはその文化を非近代的なものと見なした。しかし戦中には一転してかれらを「日本人」の系譜を受け継ぐ存在として見なすようになる。すなわち日系移民やハワイ先住民は、日本側の事情にあわせて都合よく語られてきた存在であり、それが楽園イメージでハワイを語ることの問題を浮き彫りとする。もう一つは、他者理解をめぐるわれわれの倫理観を問うている点である。近年、フラーを始めとするハワイのローカル文化への関心が日本で高まっている。しかし果たしてこれがハワイ文化の理解になっているのだろうか。カルチュラル・スタディーズが台頭して以来、他者文化に対する「まなざし」が問われてきた。本書は、ハワイが「誰にとっての楽園であるのか」という問題提起をしながら、ハワイ文化をめぐるわれわれの認識を丹念に分析する。他者文化とどう対峙すべきか、今後の他者理解のあり方を考える必読の一冊である。

李里花（多摩美術大学）

佐々木卓也 著

『冷戦——アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』

(有斐閣, 2011年, 1,500円)

今春、ひさかたぶりにニュースで「ソ連」という単語を耳にした。驚いてテレビ画面を振り返ったら、インフルエンザ・ソ連型の話だった。ああ、冷戦は遠くになりにけり——今年の大学新入生に、昔はソ連という国がアメリカと喧嘩していたのだ、ドイツは2つだったのだ、などと力説しても、一片の知識として受け取られるのがせいぜいかもしれない。

だがそれでもわれわれは冷戦史を学び、語らなければならない。著者はその理由を挙げる。第1に、今日でさえ世界は冷戦期の出来事やその遺産に大きな影響を受けていていること。リベラルな国際秩序しかり、アメリカを軸とする軍事同盟体制や経済・金融体制しかりである。第2に、アメリカ自身がいまなお冷戦の影響を強く受けていること。国際レジームへの対処、同盟国の扱い、発展途上世界政策などが典型である。第3に、終結から20年、冷戦を1つの歴史的事象として捉えられるようになったこと。史料の公開が進み、社会・文化的側面を含む多彩な冷戦研究が蓄積されてきた結果である。

超大国アメリカの本質を探るうえで、冷戦史が重要であることも付け加えたい。アメリカの行動が共産主義陣営との対立や協調を生み出しただけではなく、そこにアメリカの政治・経済・社会・文化・伝統的価値観などが色濃く投影された。対照的な理念を抱くソ連との抗争は、アメリカという存在を表象しつつ、アメリカ的なやり方で遂行された。冷戦が、本書の副題にいう「アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い」だったからである。

冷戦史であれば、第2次世界大戦終結、冷戦開始あたりから筆を起こすのが常道だろう。だが本書はまず第1章「アメリカの外交的伝統」で、孤立主義と国際主義、第1次世界大戦と威尔ソン、第2次世界大戦とローズヴェルトといった観点から、アメリカを冷戦に突入させた力学を解明する。以下、第2章「冷戦の始まり」は朝鮮戦争まで、第3章「冷戦の変容とデタント外交」はデタントまで、第4章「冷戦の終結」はドイツ統一までを追う。冷戦の開始・展開・終結という過程を踏まえて、終章「冷戦とアメリカ外交」は冷戦はなぜ起きたのか、1960年代初めには事実上決着がついていたのになぜその後も長く続いたのか、それがついに終焉にいたったのはなぜかといった疑問への解答を提示する。

ないものねだりを承知のうえであえて難を指摘すれば、日本の扱いがやや希薄なところか。だが本書の目的は、限られた紙数で、あくまでもアメリカ外交史の見地から冷戦の本質を解き明かすことにある。しかも、従来看過されがちだった視点、すなわちアメリカの外交政策と、米国内に惹起された外交論争や米国内政治との絡み合いに言及しつつ、冷戦史研究の中核に切り込もうとする、じつに「チャレンジング」(著者)な試みである。

各章末と巻末の文献リストもきわめて有用性が高い。あらためて冷戦の全体像を把握し、また個々の問題を扱おうとする者にとって、あるいは世界の現在を考え、平和的な、安定した国際社会実現という未来を思い描く者にとって、それは格好の道しるべとなるだろう。

松岡 実（筑波大学）

藤江啓子 著

『空間と時間のなかのメルヴィル——ポストコロニアルな視座から解明する彼のアメリカと地球（惑星）のヴィジョン』

(日本国際問題研究所, 2010年, 2,940円)

著者の学位論文をもとに書かれた本書は、多文化主義や「惑星思考」といった近年のトランスナショナルな文学研究の動向を踏まえながら、メルヴィルの時空間意識を再構成する試みである。本書ではメルヴィルの作品が「メルヴィルとアメリカ」「メルヴィルと旧世界」「メルヴィルと周縁の世界（アメリカを超えて）」の三つのセクションに分類され、彼のヴィジョンの射程が「地球（惑星）」であることが明るみに出される。ここで言及されるワイ・チー・ディモックの「惑星思考」とは、帝国主義的傾向を持つグローバル化に抵抗し、文化の複層性や越境性を、時に生態系をも含めた地球規模で見直し、記述する試みとして理解することができるだろう。従って、本書が「旧世界」や「周縁の世界」を取り上げる際に問題になっているのは、これらの地域そのものではなく、こういった場所とアメリカの「間」、即ち、双方が周辺にも中心になりうるような「文化的中間地帯」なのである。アメリカが周囲の世界といかに相互照射し、対話的関係を形成してきたか、著者はその「多孔性ネットワーク」生成の「プロセス」を丁寧にあぶりだしていく。

メルヴィルの比較文化的なヴィジョンの下では「アメリカ的」パラダイム、支配的価値観が見直されることになる。白人男性中心主義（1章、3章『白鯨』論）、領土拡張と征服の修辞学としての「ピクチャレスク美学」（5章『ビエール』論、12章『タイピー』論），“descending”なセンチメンタリズムやそれが可能にする「生温かいデモクラシー」（6章『バートルビー』論）、形骸化した英雄崇拜（10章『レッドバーン』論）、プロテスタント的労働倫理と結びついた樂園回復のナラティブ（15章、17章『雑草と野草』論）——こうした因習的な価値観、帝国主義、さらに西洋近代そのものがメルヴィル作品では痛烈に批判されていると著者は分析する。

越境的な想像力に着目する著者のアプローチは、従来のメルヴィル研究に見られる『コンフィデンスマント』以前の作品とそれ以降の作品という区分、あるいは、小説家メルヴィルと詩人メルヴィルという区分を乗り越えることをも可能にする。本書では、未完に終わった晩年の詩集『雑草と野草』を始めとして後期詩作品がふんだんに取り上げられており、メルヴィルの新しい側面を明るみに出すことに貢献している。

著者は19世紀の歴史的コンテキストに即して作品を分析し、メルヴィルの「ポストコロニアル的視座」を検証していくのだが、その現代的意義を考察することも忘れていない。1章、2章では画一化へ向かうアメリカナイゼーションと「マルチチュード」の相克の問題が、また、16章「メルヴィルの新しい荒地観」ではエコクリティシズム的なヴィジョンが取り上げられ、彼の作品がいかに今日的課題に応答しているかを論じる。メルヴィル作品が抵抗するのは国境という枠組みだけではなく、安定的、直線的な時間意識でもあるのだ。

貞廣真紀（明治学院大学）

塚田幸光 編著

『映画の身体論』

(ミネルヴァ書房, 2011年, 4,200円)

杉野健太郎 編著

『映画のなかの社会／社会のなかの映画』

(ミネルヴァ書房, 2011年, 4,410円)

『映画の身体論』(以下『身体論』)及び『映画のなかの社会/社会のなかの映画』(以下『社会』)はミネルヴァ書房刊行の映画学叢書に含まれる。監修を務める加藤幹郎によれば、「映画が人類の歴史においていかに重要な機能をはたし、それゆえ人間の実存といかに密接に関わるものであるかを論証」するのが本叢書の目的である。

『身体論』では、「スクリーンが隠蔽/開示」する身体」を「文化的、社会的に構築される差異としての「身体」と見なし、そこに様々な物語を読みとる。一方、『社会』では映画と社会の結節点に注目し、両者の歴史的関係を問う。二冊には18本の刺激的論考が含まれる。映画学の展開に重要な意味をもつ両書について、限られた紙面すべてを述べることは難しい。そこで本稿ではアメリカ関連の論考に焦点を当て紹介したい。

まず『身体論』では、山本秀行がカンフー映画の英雄ブルース・リーの「格闘する身体」に注目し、彼の卓越した武術と鍛え上げられた身体に、ハリウッド映画に代表されるアメリカの文化的覇権を錯乱するポスト植民地的な戦略を読みとる。『身体論』のひとつの特徴は、男性的身体が銀幕でもつ意味を明らかにする点にある。

その意味では、カウボーイの身体表象、とりわけアメリカ的マッジョーが演じる入浴シーンに関する川本徹の考察が興味深い。塚田幸光が注目するニューシネマ論は、女性の身体をスペクタクル化するハリウッドが、男性の身体までもポルノグラフィックに開示する様相を解き明かす。ブランド、イーストウッド、ホフマンら有名俳優の白い裸体は銀幕上で何をあらわすのか。

一方、名嘉山リサによるブラックスプロイテーション映画における黒人女性の身体論は、人種とジェンダーの問題を同時に提起し、また松田英男は戦時中のミュージカル映画が描く女優像を通じ、女性が直面する諸問題をあぶり出す。総じて、『身体論』はアメリカ映画における身体表象を中心に、人種や性が芸術・文化だけでなく政治的文脈のなかで表現してきたことを検証する。

『社会』においては、移民問題をいわゆる「ヴァンプ」論と結びつけ考察する山口菜穂子の『愚者ありき』に関する論考から第二次世界大戦後の『素晴らしき哉、人生!』と9/11後の『クラッシュ』を比較・分析する杉野健太郎の論考まで、人種や性に注目しつつもアメリカ社会の統治機構のあり方に重きを置いた考察が並ぶ。

さらに、「ヘイズ・コード」と呼ばれる初期アメリカ映画の検閲制度を扱った御園生涼子の『ラヴ・パレード』論やアメリカ社会における理想的自己の解体を論じた山口和彦の『ニクソン』論、写真と映画という新しい表現媒体の可能性を追求したポール・ストランドを論じる藤田修平や中産階級の食肉文化から戦後アメリカ社会と家族の関係に着目する岡田尚文の論考も見逃せない。

映画がもつ可能性と未来について再考する機会を提供してくれる両書である。

麻生享志（早稲田大学）

里内克巳 編著

『バラク・オバマの言葉と文学——自伝が語る人種とアメリカ』

(彩流社, 2011年, 2,500円)

「正しい言葉で語りかければ、すべて変わるべき可能性がある」。このような確信こそが大学生のバラク・オバマを政治家へと導くことになったのだと、オバマは自伝において回想している。オバマの言葉が表明する政治的主張については既に多く語られる一方、「作家としてのオバマ」が発する言葉とそこに潜む「文学性」は、いまだ多くの読み手にとってなじみのないものだろう。本書のエスニック文学・文化に心を寄せる執筆者たちは、オバマが無名時代に執筆した自伝『ドリームズ・フロム・マイ・ファーザー』(以下『ドリームズ』)を読み解き、オバマという政治家による回想録を、アメリカ文学およびアフリカ系アメリカン文学の歴史のうちに位置付けようとする。この新鮮な試みが明らかにするのは、『ドリームズ』が一政治家の立身出世を記す無味乾燥な手記ではなく、数世代の過去に遡るオバマの祖先をめぐる歴史的時間を縦糸に、そしてアメリカ、ハワイ、インドネシア、アフリカに点在するオバマの家族や友人たちとの間に流れる共時的時間を横糸に編まれた、豊かな文学性を誇る〈人種と遺産の物語〉だということだ。

それぞれの章は『ドリームズ』が内包する文学的・時空的な広がりを、歴史上の作家や小説と比較しながら多角的に検証する。文学的方法論に基づく読解により、二章では『ドリームズ』が19世紀の奴隸制反対論者フレデリック・ダグラスをはじめとする黒人知的伝統の水脈を引き継ぐこと、三章では混血としてのオバマを描く自伝が、同じく人種と遺産(出自)に固執したウィリアム・フォークナーの問題意識を継承しつつ書き換えていることが論じられる。四章では不在のアフリカ人の父親を探求する『ドリームズ』の主題が、「アフリカ」という地を象徴的なルーツとして描き出す現代黒人文学と親和性を持つこと、五章では「恐怖」ではなく「希望がもたらす変革の意欲によって」アメリカ社会を動かすことを提唱する自伝が、同じく「恐怖」と「希望」の主題を打ち出してきた黒人靈歌、ビリー・ホリディ、ヒップ・ホップ等の黒人表現文化と歴史的な連続性を持つことが示される。

各章の議論はそれぞれ繋がりあり、『ドリームズ』が19世紀から現代までの英米文学の伝統を豊かに織り込むテキストだということを示すわけだが、本書の大きな貢献は、「文学とは何か」という間に立ち向かっていることだろう。『ドリームズ』がまるで「小説のように読める」ことは幾度となく強調されるが、そもそも「小説」と「小説のように読める」作品との違いはどこにあるのか。この問いは、文学のように読めるかもしれないが、政治的であるがゆえに、真に文学的ではないという烙印を押されてきた黒人文学作品の数々を思い起こさせる。『ドリームズ』が、過去と未来、そして人種、階級、国家の境界を越えてみせるだけではなく、文学と文学のように読める作品、さらには文学と政治との間に横たわる境界をも搖るがせる衝動を潜ませている可能性こそ、文学研究者からオバマの政治思想に興味を持つ人々まで幅広い層の読者を刺激し魅了するに違いない。

佐久間由梨（首都大学東京・講師）

## アメリカ学会清水博賞の第17回受賞作品と第18回公募のお知らせ

故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会清水博賞」が1996年度から設けられております。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた作品を毎年1点ないし2点程度選び、賞状と賞金5万円を贈るものであります。

第17回清水博賞候補作品は、2011年1月1日から12月31日の期間に出版された著書のなかから、自薦・他薦で7点がプールされました。その後、外部査読・内部査読を経て、厳正な審査の結果、該当作品はないことで決定致しました。今回は、会員21名の皆様に外部査読者として当委員会の審査にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

次回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2012年1月1日～2012年12月31日）に刊行された著書で、該当する研究にお気づきの会員（自薦も可）は、2013年1月10日までに件名「2012清水博賞候補推薦」にて事務局（[office@jaas.gr.jp](mailto:office@jaas.gr.jp)）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

## アメリカ学会斎藤眞賞について

斎藤眞賞は、アメリカ学会が刊行する2つの会誌に最近2年間に掲載された論文のうち「主として若手会員による論文」（斎藤眞賞内規）から選考されます。慎重な審査の結果、今回は以下の方々の受賞が決まりました。

中野耕太郎 “How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago.” *The Japanese Journal of American Studies* No.22 (2011).

鶴淵秀一「商業社会の倫理と社会関係資本主義の精神——『フランクリン自伝』における礼節と社交』『アメリカ研究』45 (2011年)。

増田久美子「ボーディングアウトする女、家庭にしがみつく男——(反) ボーディングハウス小説におけるセアラ・J・ヘイルのドメスティック・イデオロギー」『アメリカ研究』45 (2011年)。

選考委員会名簿（五十音順）

荒木圭子（東海大学） 石山徳子（明治大学） 久保文明（東京大学・委員長） 小桧山ルイ（東京女子大学）  
田中景（東京経済大学） 常山菜穂子（慶應義塾大学） 中野勝郎（法政大学） 新田啓子（立教大学）

## 新入会員

伊澤正興	阪南大学	経政史
石生義人	国際基督教大学	政社宗
上杉健志	McGill大学	科史人類学
遠藤美佳	同志社大学	史
岡本太助	大阪大学	文米社
小川裕子	東京大学	外政法
楠香織	津田塾大学	史日
末木淳子	京都大学	文史民
竹内勝徳	鹿児島大学	文衆米
田中慎吾	大阪大学	政外日
星野文子	公益財団法人 東京財団	米文
堀内香織	東洋大学	文衆米
松坂裕晃	ミシガン大学	史思社
有限会社 アサノ	維持会員	
(財) 名古屋大学出版会	維持会員	

## 会員の皆さんにお願い

- ・住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局までお知らせ下さい。
- ・メールアドレス登録されていない方は、極力ご登録下さいようお願い申し上げます。
- ・会費の引き落とし（銀行および郵便局）にご協力下さい。事務局までご連絡いただければ、必要書類をお送りいたします。領収書は引落後に発行しています。

事務局 e-mail address: [office@jaas.gr.jp](mailto:office@jaas.gr.jp)

## 第 47 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 47 回年次大会は、2013 年 6 月 1 日（土）、2 日（日）に、東京外国语大学で開催されます。日程は、次号会報にてお知らせします。企画提案やご報告希望を下記の通り募集いたしますので、会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。部会につきましても、一般会員からのご提案に基づいて企画されますので、よろしくお願ひいたします。なお、すべての応募は事務局 <office@jaas.gr.jp> 宛に、1~3 のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

### 1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11 月 20 日）

報告テーマ、1,500 字程度の要旨、およびキーワード 5 つを記載。自由論題での報告は会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象としますので、ご注意ください。また、2013 年の 5 月 15 日までにペーパー（和文の場合 8,000 字～12,000 字、英文の場合は 5,000～7,500 words 程度）を提出していただき、それを学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後 2 週間のみ、ペーパーを読むことができるようになります。なお、大会当日の報告時間は 20 分とし、報告は 2 年連続を上限とします。

### 2. 「部会の企画提案」（締切日：8 月 31 日）

部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてお願いしますが、部会の企画に関しては、以下のようないしわせ事項がございますので、ご留意ください。第 45・46 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 47 回大会の部会では報告できません。司会者、討論者として応募されることも、原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。会員以外の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、バランスに配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とはいたしません。

### 3. 「分科会開催申し込み」（締切日：8 月 31 日）

新規の場合は、分科会趣旨（400 字以内）と、連絡責任者および賛同者 5 名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会



## 英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

### 1 英文ジャーナル 24 号英文書誌の募集について

2011 年に英語で書かれた著作、論文（博士論文を含む）に関する情報を同封別紙にタイプで記入（コンピュータ作成原稿を貼り付けても結構です）のうえ、9 月 20 日までに学会事務局宛お送りください。指示された形式に従って原稿を作成して下さいますよう、お願ひいたします。なお、今年度から、本英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなりましたので、ご注意ください。

### 2 英文ジャーナル 25 号への投稿について

学会英文ジャーナル 25 号（2014 年 6 月発行）へのご投稿を計画されている会員は、次のような日程になっていますので、ご留意ください。

25 号の特集テーマは “Dissent” です。原稿応募申込み（論文要旨）の締め切りは 2013 年 1 月、原稿締め切りは 2013 年 5 月です。詳しい日程については、11 月の会報をご覧下さい。なお、『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

### 編 集 後 記

先日、南部の人種差別の歴史を取り上げた授業で、映画『グレート・ディベーター 栄光の教室』を題材に学生と討論を行った。映画の舞台は 1935 年南部テキサス州マーシャル。実話に基づいた物語では、黒人学生が教授の指導を受けながらディベート・チームを結成し、最後はハー

バード大学の白人学生に挑んでいく成長過程を描いている。人種問題を扱った映画は『ミシシッピー・バークニング』等多数あるが、この映画は現代の日本の学生から見ても主人公に親近感や関心を持ちやすく、学生と南部人種差別の歴史を考える題材には、打って付けであった。

（清原）

2012 年 7 月 30 日 発行
ア メ リ カ 学 会
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター 気付
Tel & Fax (03) 5454-6163
<a href="http://www.jaas.gr.jp">http://www.jaas.gr.jp</a>
発行人 古 矢 旬
編集人 庄 司 啓 一
印刷所 啓 文 堂 松 本 印 刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巣町 565-12